

国交樹立以前の文献からよみとく
トルコ人の日本観、日本人のトルコ観

指導教官：新井 政美
学籍番号 8505031
南・西アジア課程
トルコ語専攻

川原田 喜子

目次

序章	3
第1章 日土交流の始まりと発展	
(1) 年表	5
(2) 人物の行き来	6
(3) 国交樹立までの流れ	8
第2章 日本側の文献にみるトルコ	
(1) 日本人による記録と訪土の経緯	11
(2) 日本人のみたトルコ	
1. 町の印象	13
2. トルコ人の印象	16
3. イスラームについて	17
第3章 トルコ側の文献にみる日本	
(1) 雑誌 <i>Genç Kalemler</i> より	
1. <i>Genç Kalemler</i> および掲載論文について	19
2. 前書き	19
3. 論文『Garp Medeniyetinin Japonya'ya dühülü』	21
4. 後書き	24
(2) アブデュルレシト・イブラヒム著『ジャポンヤ』より	
1. 作者について	25
2. 日本人の印象	26
終章	29
参考文献一覧	30

序章

「トルコは世界でも有数の親日国である」ということをよく耳にする。出会ったトルコ人から「私たちは日本が大好きだ」と言われることも多い。その理由を尋ねると答えは様々である。日露戦争で日本がロシアに勝利したからだと言う者もいれば、日本の近代化のプロセスに尊敬の念を抱くと言う者もいる。中にはよくわからない理由もあるが、「トルコは親日国」というイメージがトルコ人の中にも日本人の中にも根付いていることは間違いない。

この親日感情は、どれほどの歴史を持っているのだろうか。今でこそ人や情報の行き来が活発になっているが、日本とトルコの間で交流が始まった時期には、互いにどのような情報を手に入れどのような印象を持っていたのだろうか。トルコで発行された雑誌やトルコを訪れた日本人の残した記録を中心に当時の両国の関係を読み解き、トルコが親日国と言われるようになったルーツが見られないかを探ることが本稿の目的である。

まず第一章では、日本とトルコとの関係がどのように始まり発展していったのかをまとめ、第二章以降で文献を見てゆくための足がかりとしたい。いくつかの論文¹および「日土交渉史」を主に参考にする。

明治初期からは、外交官はもちろん学者、教育者など多彩な分野の日本人たちが外交や視察、外遊のためにトルコを訪れ記録を残している。第二章ではこれらの人々が書き残した日記等から、当時の日本人がトルコにおいて感じたこと、またトルコ人の日本人に対する反応をまとめてゆく。

続いて第三章ではトルコ側の文献に触れる。雑誌 *Genç Kalemler* に連載された、英語からの翻訳論文²と筆者の日本に関する雑感で構成された記事“Japonya imparatorluğu”を取り上げる。外国語からの翻訳が中心ではあるが、当時のトルコの知識人たちが日本に関してどのような情報を得ていたかを直に知ることができる点で有意義であると考えられる。またトルコと関わりの深い人物が実際に日本を訪れた際の記録として、日本を訪れたタタール人ムスリムであるアブデュルレシト・イブラヒムの著書「ジャポンヤ」にもふれる。彼は

¹ 白岩一彦「明治期の文献にみる日本人のトルコ観」、波多野勝「エルトゥールル号事件を巡る日土関係」、長場紘「日本とトルコ—国交樹立への歩み—」

² 英語から直接訳されたかは不明。論文の筆者は末松謙澄（第3章参照）

トルコ人ではないが、彼の著書は当時のトルコ知識人階級の日本観に大きな影響を与えたと考えられる。以上の文献の内容をまとめ、それぞれから読み取れる親日意識を考察する。

これらをもとに、最終章では当時の日土関係とトルコ人の日本に対する思いについて自分なりの考えを導き出したいと思う。

第1章 日土交流の始まりと発展

(1) 年表

初期のトルコ・日本両国の関係における主な出来事および本稿で取り上げる人物の活動を年代順にまとめると、以下のようになる³。

1873 (明治 6) 年	4 月、岩倉使節団の一等書記官・福地源一郎、僧侶・島地黙雷がトルコを訪れる
1876 (明治 9) 年	在英公使館員・中井弘がイスタンブルを訪問し国情調査を行う
1878 (明治 11) 年	日本の軍艦・清輝がイスタンブルを親善訪問
1881 (明治 14) 年	外務省理事官・吉田正春がイスタンブルへ
1886 (明治 19) 年	12 月、農商務大臣・谷干城がイスタンブルへ
1887 (明治 20) 年	小松宮彰仁親王がイスタンブルを訪問し、スルタンに謁見
1890 (明治 23) 年	トルコ軍艦・エルトゥールル号が来日するも、帰途和歌山県沖で沈没
1891 (明治 24) 年	1 月、日本軍艦・比叡と金剛がイスタンブルへ
1892 (明治 25) 年	4 月、山田寅次郎がイスタンブルへ
1893 (明治 26) 年	4 月、駐独公使 (元外相) 青木周蔵がイスタンブルへ 12 月、「日本トルコ両帝国宣言案」が閣議に提出される
1894 (明治 27) 年	3 月、東伏見宮依仁親王がイスタンブル訪問
1894～95 (明治 27～28) 年	日清戦争
1895 (明治 28) 年	8 月、「日本トルコ両帝国宣言案」閣議決定
1896 (明治 29) 年	鎌田栄吉、イスタンブル訪問
1898 (明治 31) 年	黒板勝美、トルコ訪問
1904～1905 (明治 37～38) 年	日露戦争
1906 (明治 39) 年	アブデュルレシト・イブラヒム来日
1909 (明治 42) 年	参謀本部の宇都宮太郎少将がトルコ訪問

³ 年表は「日本・トルコ協会 70 年史」収録のものに基づく。

- 1914（大正 3）年 山田寅次郎帰国
- 1914～1918（大正 3～7）年 第一次世界大戦
- 1921（大正 10）年 4月、特命全権公使・内田定槌が在トルコ日本政府外交
代表者に就任
- 1923（大正 12）年 7月、ローザンヌ条約締結
10月、トルコ共和国宣言
- 1924（大正 13）年 6月、ローザンヌ条約発効。日本とトルコの国交が正式
に樹立。
- 1925（大正 14）年 3月、在トルコ日本国大使館がイスタンブルに開設
7月、在日トルコ大使館が東京に開設

以下年表に従い、主な出来事を年代順にみてゆくが、記録等の細かい内容については第三章で触れることにし、ここではその出来事が日土両国間の関係においてどのような意義をもっていたのかを説明したい。

（2）人物の行き来

初めてトルコを訪れた日本人が誰であったのかは不明であるが、文献を見る限りで、初めてトルコを訪れ記録を残している日本人は福地源一郎と島地黙雷である。福地源一郎は岩倉使節団に通辞として加わっており、裁判制度の調査のため、1873（明治 6）年 4月 11日から 23日までイスタンブルに滞在した⁴。浄土真宗の僧侶である島地黙雷がこれに同行。島地が福地に同行した理由は明らかではないが、島地は旅の記録である「航西日策」の中にイスタンブルについて記録を残している。

次いで 1876（明治 9）年には、在英公使館員であった中井弘が帰国の途にイスタンブルを訪れている。非公式の訪問ではあったが、日本の外交官がトルコを訪れたのはこれが初めてのことである。中井は同行していた外交官の渡辺洪基と共に当時のオスマン帝国の外務大臣、大宰相などと会見。なお中井は帰国後に「漫遊記程」を出版しているが、その中にはトルコでの体験も記されて

⁴福地はパリ滞在中に日本の全権副使からギリシャ、オスマン帝国、エジプトにおける混合裁判所の調査を命じられた。

おり興味深い。

1878（明治 11）年、日本の練習艦隊「清輝」がトルコを親善訪問し、イスタンブールの港に 12 日間停泊した。艦長であった井上海軍中佐は当時のスルタン、アブデュル・ハミト二世に謁見している。

1881（明治 14）年には、ペルシャへと派遣された外務省理事官・吉田正春を団長とする使節団が、ペルシャでの調査活動終了後にオスマン帝国を訪れている。彼らのトルコ滞在に関しては、使節団の一員であった陸軍大尉・古川宣誉が帰国後に著した「波斯紀行」に詳しい。一行は滞在中に二度アブデュル・ハミト二世と謁見し、会食の席でアブデュル・ハミト二世がエルトゥールル号派遣に言及した記録も残されている。

1887（明治 20）年に小松宮彰仁親王がトルコを訪れる。これは軍事視察および各国の王室との親交を深めるための外遊の一環であった。親王はイスタンブール滞在中にアブデュル・ハミト二世とも面会し、日本の皇室関係者の訪問はトルコ側に強い印象を与えたと思われる。

そして 1890（明治 22）年、アブデュル・ハミト二世は小松宮親王訪土の答礼、日土条約締結促進、トルコの海軍力強化および汎イスラーム主義啓蒙を目的に、軍艦エルトゥールル号を日本に派遣するのである。海軍少将オスマン・パシャはトルコの特派公使として明治天皇に謁見、国書と勲章を贈呈し、オスマン・パシャ自身も天皇から勲章を授けられている。周知の通りエルトゥールル号は帰途、和歌山県沖で不運な事故に遭うのであるが、沈没事件に日本政府は迅速に対応した。同年中に軍艦比叡・金剛が生存者をトルコに送り届けるため日本を出航し、翌 1891（明治 23）年イスタンブールに到着した。軍艦の派遣には生存者搬送のほかに、やはりトルコとの友好を深め、条約締結につなげようというねらいもあったとみられる。一行はイスタンブールで歓迎され、皇帝との晩餐の席では条約締結に向けた意見交換もなされたようだ。

エルトゥールル号事件がきっかけでトルコと深く関わるようになっていった人物が山田寅次郎（1866～1957）である。事件を知った山田は現在の価値にして約 1 億円の義捐金を集め、1892（明治 25）年にイスタンブールを訪れた。その後約 22 年に渡ってイスタンブールに滞在し、日本商店の開設や士官学校での日本語教育などを行った山田が、トルコにおいて日本という国が認知される過

程に大きな功績を残したことは間違いないだろう。

1893（明治 26）年、当時は在独日本公使であった元外務大臣・青木周蔵がトルコを訪れスルタンに謁見。アブデュル・ハミト 2 世より条約締結の要請を受けて日本へ条約の準備を進めるよう報告した。

1898（明治 31）年には国史学者・黒板勝美がトルコを訪れ、わずか 10 日足らずの滞在日数にもかかわらず、スミルナ（イズミル）、チャナッカレ、トロイについて詳しい記録を残している。

1906（明治 39）年、タタール系ロシア人・アブデュルレシト・イブラヒムが汎イスラーム主義啓蒙のために日本を訪れた。彼は日本各地を見学、各界の著名人と積極的に交流し、著書「ジャポonya」に日本滞在の様子を克明に記録している。

翌 1909（明治 42）年、参謀本部の宇都宮太郎少将がトルコを訪問し、トルコとの条約締結は軍事的見地から日本にとって非常に有益である、という旨の報告書を提出している。

（3）国交樹立までの流れ

日本にトルコという国が紹介されたのは江戸時代のことだが、それらはあくまでもヨーロッパの書物などを通して間接的に入ってくる情報であった⁵。明治時代に入り、実際にトルコを訪れた日本人からの情報を手にするようになって初めて、日本人はトルコを現実的に認識し、政府においても国交樹立への関心が生まれたと考えられる。おそらくトルコにおいても同じ状況で、日本人がトルコを訪れるまで、日本という国は名前こそ知っているが存在を実感できない遠い国としてしか認識されていなかったのではないだろうか。

日本とトルコの国交樹立への最初のきっかけは、1876（明治 9）年に非公式ではあるが日本の外交官としてイスタンブルを訪れた中井弘と当時のオスマン帝国外務大臣および大宰相との面会であった。会話の中で日土条約締結を望む発言がなされたという記録が残っている⁶。

⁵ トルコが登場する江戸時代の書物としては、西川如見『四十二国人物図誌』（1720年頃）、新井白石『西洋紀聞』（1715年）など

⁶ 第 2 章参照

その後日本人がトルコを訪れスルタンや政府要人と会うたびに条約締結は話題に上っていたようであるが、なかなか具体的な前進には至らない状態であった。トルコが日本と対等条約を結ぶことを望んだのに対し、当時の日本が外交方針からこれを断固として受け入れなかったことも順調な交渉の妨げとなった⁷。

1889（明治 22）年のエルトゥールル号来日、沈没事故、そして日本の軍艦のトルコ訪問は日本・トルコ関係を考える上で忘れることのできない出来事である。日本でこの事件は大きく報道され、人々の間でトルコという国の知名度は一気に上がったと考えられる⁸。トルコの人々にとっても、民間人に救出された生存者を乗せた軍艦の訪問は印象的な出来事であったはずだ。この不幸な事件によりそれまで接触の少なかった日土両国の関係が大きく発展したともいえるだろう。

1893（明治 26）年、トルコを訪れアブデュル・ハミト 2 世から条約締結への強い希望を聞いた在独日本公使・青木周蔵の報告を受け、ようやく「日本土耳其両帝国宣言案」が閣議に提出された。しかし翌年に日清戦争が勃発し、同案が正式に閣議決定されたのは 1895（明治 28）年のことであった。

1904～1905（明治 37～38）年の日露戦争での日本の勝利はトルコに衝撃を与え、同国における日本の認知度は一気に上がったと考えられる。日本海海戦でバルチック艦隊を破った東郷平八郎にあやかり、当時の知識人階級トルコ人の多くが子供に「トーゴー」という名前をつけた、などという逸話も残っている。

その後 1914～1918（大正 3～7）年の第一次世界大戦でトルコは同盟国側、日本は連合国側でそれぞれ参戦し、敗北したトルコはセーヴル条約に調印。これを受け、特命全権公使・内田定槌が在トルコ日本政府外交代表者に任命され、イスタンブルに着任した。

1923（大正 12）年、トルコ独立戦争の終結によりローザンヌ条約が締結され、同年 10 月にトルコ共和国が誕生。翌 1924（大正 13）年には同条約が発行

⁷ 当時は征韓論等もさかんで、アジアの国と治外法権なしの条約を結ぶのは日本にとって考えられないことであった。

⁸ 『東京朝日新聞』はこの事件を社説にもとりあげるなど積極的に報道した。

され、これと同時に日本とトルコの間でようやく正式な国交が樹立した。さらに翌 1925（大正 14）年には、イスタンブルと東京にそれぞれの大使館が開設された。

このように、初めて日本人がトルコを訪れ外交的接触をしたという記録から国交樹立に至るまでには 50 年を要している。二国間ですみやかに条約が締結されなかった理由としては、条約交渉開始当時の日土両国はどちらも欧米列強との間に結ばれた不平等条約の改正が最重要の外交課題であったことや、単純に 2 国間の距離が遠く、日本の場合は朝鮮や中国、トルコの場合はギリシャやロシアといった近隣諸国との諸問題に対処することで精一杯であったことなどが挙げられるであろう。

条約締結のプロセスはすみやかに進まなかったが、50 年の間には多くの日本人がトルコを訪れ、興味深い記録を残している。またトルコの人々がはるか遠くの島国日本に決して無関心でなかったことを示す文献も残っている。第 2 章以降ではそのような資料をみてゆきたい。

第2章 日本側の文献にみるトルコ

(1) 日本人による記録と訪土の経緯

・島地黙雷『航西日策』

『航西日策』は、福地源一郎とともにトルコを訪れた僧侶・島地黙雷が日本を出発してヨーロッパを巡り、帰途インドに辿り着くまでの旅を記録した日記であり、途中およそ7ページにわたってトルコに関する記述がみられる。トルコを訪れた日本人の記録としては最も古いものということになる。

島地の滞在記にはガラタ塔、アヤ・ソフィア大聖堂、スルタン・アフメット・モスク、スレイマニエ・モスクなど観光名所を訪れたことのほか、トルコ語の数字も記録されており、彼がトルコ滞在を楽しみ積極的に多くを学んだ様子がみてとれる⁹。また、フランス大使館を訪れたりペルシャの外務官と会談したりしていたことも日記の記述からわかる。

・中井弘『漫遊記程』

中井は1876（明治9）年2月27日、英国からの帰国の途中にロシアのオデッサから船に乗り、黒海をわたってイスタンブルに到着した。

中井はイスタンブルに滞在中、モスクやヒッポドロームを観光したほか、外務大臣、各国公使らと面談している。

外務大臣ラシット・パシャを訪ねた際には、大臣が「我カ土国モ亦貴国ト交際通信セント欲スル茲ニ幾年未タ其機ヲ得ス今貴下ノ来臨ヲ辱ウス是ヨリ交際信誼ヲ厚ウシ互ニ来往スヘシ土耳古ハ亜細亜ノ人種ニシテ貴国トハ同種類タレハ長ク交際ヲ厚ウセンコトヲ希望ス」

と、日本との国交を強く望む発言をしている。渡邊氏はこれに対し感謝の意を伝えたくて、

「此度ノ旅行ハ全ク私遊ニシテ公事ニアラサレハ公事ヲ以て答ルヲ得スト雖モ今貴下ノ厚意ハ一々帰国ノ上我外務卿ニ申述スヘシ己後必ス互ニ公使ヲ派遣シ交際スルノ時ヲ期スルヲ欣悦スルナリ」

⁹ カタカナでトルコ語の数字が記されている。

と、条約締結に向け政府に前向きに働きかける旨を伝えたという¹⁰。

・『軍艦金剛土耳其国航海報告』、『軍艦比叡土耳其国航海報告』

この2冊は、エルトゥール号の生存者を乗せイスタンブルを訪れた日本の軍艦「比叡」および「金剛」の航海の記録である。両艦は「紀州檜野埼付近ニ於テ難破シタル土耳其軍艦エルトグロー号ノ生存者ヲ本国ニ送致スル為メ且練習少尉候補生八十九名ノ実地練習ノ為メ¹¹」1890（明治23）年10月に品川を出港し、香港、シンガポール、コロンボ、アデン、スエズ、ポートサイド、スミルナ（イズミル）を経てイスタンブルに到着した。到着は1891（明治24）年1月2日であった。同年2月10日まで、両艦はイスタンブルに停泊している。

・鎌田栄吉『欧米漫遊雑記』

外交官ではない人物もトルコを訪れ記録を残している。そのうちの一人が鎌田栄吉である。

教育者・鎌田栄吉はヨーロッパ、エジプト、オスマン帝国、アメリカ、カナダを巡った外遊についてまとめた『欧米漫遊雑記』の中で、32ページにわたってトルコ滞在の記録を残している。全体的にかなり厳しい意見が多く見られるのが特徴である。

鎌田はヨーロッパ各地を巡った後、ブルガリア経由でトルコに入った。トルコに関する章は「ブルガリヤ境を出てトルコ領に入るや停車場には赤色の頭巾を冠して面色暗濁たる土耳其兵の車中に来り旅行券を調ぶるあり、四方を望めば唯茫茫たる原野に虚々の羊群を見るのみ、又時々眼に映ずるは土耳其人の茅屋にして陋醜見るに堪へざるものあり…」とかなり辛辣な書き出しである¹²。総理衙門を訪ねた記録の中には「土国は我條約国に非ざるを以て、我公使領事の在留するものなけれども、先年エルトグルール号を送還せし為め彼国の人士は我高義に感じ日本人の来遊を喜ぶこと甚だし」という、日本人がトルコで非

¹⁰ 中井弘『漫遊記程』p37～38

¹¹ 小椋元吉、松村龍雄述『軍艦比叡土耳其国航海報告』p2

¹² 鎌田栄吉『欧米漫遊雑記』p250

常に歓迎されたことがよくわかる記述が残っている。¹³

・黒板勝美『西遊二年欧米文明記』

国史学者であった黒板勝美は1908～1910（明治41～43）年にかけて欧米を中心に19カ国を旅行、このうちトルコに滞在したのは1909（明治42）年の2月12日から21日までのわずか10日間である。短い滞在期間ではあったが、帰国後に著された『西遊二年欧米文明記』にはトルコで訪れた場所や出会った人々について詳しい記録が残されている。

トロイ遺跡では、遺跡の番人の老人と親交を深めたという。「…毎年諸方の学者観光の客こゝに遊ぶもの猶ほりきに、今日はじめて東方日出国の貴客に接したのは老餘の光榮なり」という老人の言葉が記録されている。¹⁴

トルコに関する黒板の記述は「（前略）土耳其は余をして多少その前途を悲觀せしめ、たゞその歴史と山水とを憧憬せしむるに過ぎなかつた」¹⁵と結ばれており、彼が美しい景観や歴史的建造物に感動しつつも、近代化が上手くゆかないトルコの将来を憂えていた様子がうかがえる。

（2）日本人のみたトルコ

1.町の印象

訪れた町の第一印象についての記録は以下のようなものである。

〈a〉イスタンブル（コンスタンチノーブル）

「人民猥雑。殆んど印度に髣髴せり。土耳其の大盛都なれば鬪熱も亦甚だし。木構の家多く、上階程次第に大なり。北南に分れて間に川を隔つ*。人家多くして猥醜極まる。南地は人家少なくして欧人多く居す。北地の端は往古のビザンチンなり、今は之に数倍したる繁昌なり。背に物を負うは貧民荷を運ぶなり。馬車少なく騎馬多し。犬は皆野郎扱にして道路の間に伏す（決して欧犬

¹³ 鎌田、前掲書、p257

¹⁴ 黒板勝美『西遊二年欧米文明記』

¹⁵ 黒板、前掲書

は居らず)」¹⁶（島地黙雷『航西日策』）

「道路細石突出シテ歩行ニ難ム且ツ泥濘鞋ヲ没ス人家皆木製ニシテ間々石造ノ屋宇アルヲ見ルモ一般不潔悪臭鼻ヲ穿チ赤帽ノ人民雜沓道路ニ踞立シテ吠犬ト共ニ客ノ歩行ヲ妨ケ乞人路傍ニ在リ客ヲ擁シ錢ヲ乞フ其穢惡ノ状一見以テ厭避スヘシ予海上ヨリ眺望シテ其外形ノ美觀ナルニ驚キ今亦此惡穢不潔に驚キ大ニ失望ノ思ヲ為セリ」¹⁷（中井弘『漫遊記程』）

「(前略) 万事不整頓ヲ極メ一ノ斬新奇抜標準トナスヘキモノナシ市街モ外觀甚美ナルカ如キモ道路泥濘歩ニ堪ヘス」¹⁸（軍艦比叻土耳其国航海報告）

「海上ヨリ眺望スルトキハ三方ノ市街何レモ丘陵ニ沿フテ宮殿、樓閣、寺院、堂塔各所ニ聳ヘ其美觀真ニ筆紙ニ尽シ難シ然レドモ遊覽スルトキハ市街道路狭ク且道路ノ修繕ニ意ヲ用キザルヲ以テ冬季ノ如キハ泥土靴ヲ没シ歩行頗ル難シ」¹⁹（軍艦金剛土耳其国航海報告）

「君斯丁堡（コンスタンチノーブル）はボスポラスの一葦帯水を隔て、
歐亞兩大陸に跨がり古昔の羅馬府に摸倣して七丘上に連立し、海上より眺むれば無数の円塔尖塔林立してマルモラ海に臨みたる光景は実に亜刺比亜夜話の仙境も斯くやあらんと想はるゝ程なれども、一たび足を市井の巷に容るゝときは道路狭隘汚穢にして敷石の上は泥濘を以て埋め、且路傍に狗の群集すること驚入る許りなり（犬を殺すは回教の禁なり）但し其狭隘汚穢は欧州都府の道路に比して云う迄にして、我東京の道路に較ぶるときは遥かに勝れり…」²⁰（鎌田栄吉『欧米漫遊雜記』）

「されど君府は天然の山水と歴史的遺物がまづ観光の客を喜ばしむると共

¹⁶ 二葉憲香、福嶋寛隆編『島地黙雷全集』第5巻 p76

¹⁷ 中井、前掲書、p33

¹⁸ 小椋元吉、松村龍雄、前掲書、p38

¹⁹ 藤戸永綱、磯部謙次郎述『軍艦金剛土耳其国航海報告』 p45-46

²⁰ 鎌田、前掲書、p252

に、その風俗習慣が如何にも珍しく眼に映じて来る、赤い土耳其帽を被り寛濶な衣服に優然たる住民が三々五々禮拜せる回教寺院を出づれば、汚い街衢の間に野良犬の温和しく食を獵るのが彷徨して居る、聞けばその野良犬は人口百萬の君府に凡そ五十萬の多数に及び、各勢力範圍を有して互に相侵さぬところに、却つて人間社會よりも勝つて居るやうな心地を起さず、しかもその犬は耳の立つた東洋種で、土耳其人の本據から随従し來つたものであるのかと想へば一種の感慨を生ぜしむるのである」²¹（黒板勝美『西遊二年欧米文明記』）

訪れた人の記録は非常に似通っている。全員に共通するイスタンブルの印象は、海から眺めると非常に美しいが実際に歩いてみると汚い、道路が悪い、ということである。野良犬の多さが必ず取り上げられ、東洋種の犬しかいないなど解説が加えられていることも興味深い。トルコに対し辛辣な批判を書き連ねている鎌田だけが、道路に関してはヨーロッパに比べれば劣悪とはいえ東京の道路よりも整備されていると述べているが、これは果たして本当なのだろうか。

全体的に、当時の日本人にとってイスタンブールは混沌として非文明的な場所であったようだ。比叡と金剛の乗組員以外は欧米を訪れた後にイスタンブールへ向かっており、彼らの目にアジアの雰囲気を持つイスタンブールが猥雑とした都市に映ったのは当然のことともいえる。

〈b〉イズミル

「盛大の寺院は寺院は回教・希臘教共に有り。希臘教頗る美寺あり。野良犬少し。駱駝、隊を為して運送す、而して客と人とは騾に乗る」²²

（島地黙雷『航西日策』）

「マホメット宗の寺院は殆んど観るべきものなきに、希臘教の寺院に輪奐たるもの少くない」

「その名は亜細亜なれど、さながら希臘の一部分なるかのやうな感がする」²³

²¹ 黒板、前掲書

²² 島地、前掲書、p82

²³ 黒板、前掲書

(黒板勝美『西遊二年欧米文明記』)

このようにイズミルに対しては、美しいギリシャ正教の教会が多く、トルコよりもギリシャの雰囲気に近いという印象が強かったようだ。批判的な意見は少なく、ここからも当時の日本人たちがヨーロッパ的な都市により魅力を感じていたことがわかる。

2.トルコ人の印象

滞在記の中にはトルコ人に関する次のような記述もみられる。

「土耳其人終生の目的は文武の官吏と為るに在りて商業の如きは大に之を賤しみアルメニヤ人か又は希臘人の業となし、学問は以て欧州人の業と為し、自家の本領は風采を上品にして人の上位に立つに在りと為す」²⁴

「土耳其人の短所を挙げれば殆んど枚挙に遑あらずと雖も、然れども亦其の長所なきに非ず。(中略)素と武勇一偏の民族にして、性質率直剽悍決死の気象に富めるが故に、官吏商人政治家として、その手際の甚だ拙劣なるにも拘らず、軍人としては全くこれに反し、適れ屈強の兵士として賞讃するに余あり」²⁵
(以上、鎌田栄吉『欧米漫遊雑記』)

「かくて土耳其人が回教を信ずる熱烈なると同時に、他宗教の国民を虐待するのは度々起る事実である、同種族の間には信義に強く同情に厚きも、多民族には残忍なることを敢てする」²⁶ (黒板勝美『西遊二年欧米文明記』)

官吏となって人の上に立つことだけを目的にしている、短所を挙げればきりが無い、トルコ人以外には残忍なことを平気でするなど、かなり批判的な意見が目立つ。長所として挙げられている武勇や仲間内での結びつきの強さは現在のトルコの人々にも共通することではないだろうか。

²⁴ 鎌田、前掲書、p261-262

²⁵ 鎌田、前掲書、p279-280

²⁶ 黒板、前掲書

これらの記述には偏見や誇張された表現も多いと思うが、当時の日本人がトルコ人を明らかに自分たちよりも下等な存在として見下していたことがうかがえる。彼らにとってトルコは決してヨーロッパの一部ではなく、後進的なアジアだったのだろう。

3. イスラームについて

当時の日本人にとってはまだまだなじみがなかったであろうイスラームに関しては、次のような記述が残っている。

「風俗ハ回々教徒ナルヲ以テ他ノ欧州諸国ト全ク異ナリ男子ハ貴賤ノ別ナク皆赤帽ヲ戴キ戸内ト雖モ之ヲ脱スルコトナシ女子ハ外被ヲ覆フテ纔ニ両眼ヲ顕スノミ而シテ戸外ニ出ヅルコト稀ナリ且中等以上ノ生活ヲナスモノ、女子ニ至ッテハ毫モ戸外ニ出ヅルコトナシト云フ又寢食等ニ至ル迄全ク欧州諸国ト異ナルナリ（後略）」²⁷（『軍艦金剛土耳其古国航海報告』）

「土耳其婦人は数人同車覆面して道を行くもの多し、通常黒絹の外被を着し、面部は白き薄絹を以て、上下より合せ、覆い僅に両眼のみを現はせり、中人以上は歩行し、覆面も白絹を用ひずして、黒衣を頭上より被るを常とす、ボスフォラス通ひの汽船にも婦人の為に別室を設けてハレムと記し、又市中乗合馬車の如きも其の一局部に粗末なる帳幕を卸して、特に婦人席となす、而して各家婦人の在室は其窓に細格子を嵌めて行人の眼を遮ぎるの装置を為す、皆是れ婦人を遮絶する風俗に依るものなり」²⁸

「彼の信心堅固なる回教徒は嘗て虚言を吐かず、飲酒せず、吸煙せず、一塊の握り飯と一片の羊肉を喫して満足し、絶へて疲労を覚へず、寒暑を知らず又貧苦を意とせず、剛勇にして死に就くと帰するが如し、是れ回教の信仰に依りて天命を信ずること厚く、死生は命なり、富貴は天にありとなし、唯天帝（アラア）と国王（ソルタン）の為に一身を犠牲に供して宗教の為に戦ふを願ふの

²⁷ 藤戸永綱、磯部謙次郎、前掲書、p46

²⁸ 鎌田、前掲書、p268-269

み、左れば其の戦に出づるや、家を焼き妻子を離縁し、甚きは之を縊殺して進むと云ふ、死あるを知て生あるを知らず、一心唯奮闘を希ふと今、回教の説く所を聞くに、大に佛耶両教と異なり、彼の地獄を以て針の山賽の河原の修羅界となし、極楽を以て單純に安樂浄土と想像せしむるに反し、毫も地獄の苦厳を云はず、唯極楽を以て酒池肉林の境界に美人嬌笑歌舞宴樂するの現世的快樂郷と為したるは、想ふに無智の愚民をして死を輕んぜしむるの好方便ならんか、此を以て死を恐れざると同時に自殺を行ふもの、殆んど稀れなるは如何なる不幸に遇ふと雖も、之を天に歸して敢て落胆せざるが為なりと云ふ」²⁹

(鎌田栄吉『欧米漫遊雜記』)

女性の服装が取り上げられているのは、町を歩いていてよく目についたからだろうか。このように女性を他人の目に触れさせないようにする習慣はかなり奇妙なものに感じられたようだ。

鎌田の記述は握り飯と一片の羊肉で満足する、戦争に行く時は妻子を離縁あるいは殺すなど、かなり誇張された印象である。また、女性に関する記述においても同じことがいえるが、イスラームに対して奇妙な宗教だ、愚かな宗教だというやや偏った見方をしているように感じられる。これもまた当時の日本人に共通する感覚であったのだろう。

²⁹ 鎌田、前掲書、p280-281

第三章 トルコ側の文献にみる日本

1) 雑誌 *Genç Kalemler* より

1. *Genç Kalemler* および掲載論文について

雑誌 *Genç Kalemler* は 1910 年から 1912 年にかけてセラニキ（現ギリシャのテッサロニキ）で発行されていた雑誌である。バルカン戦争が勃発しセラニキがオスマントルコ領ではなくなると同時に廃刊となった 1912 年 11 月までに、全 4 巻 33 号が出版されている。

ここで取り上げる連載“*Japonya İmparatorlugu*”は、1911 年に 3 回にわたり連載されていたものである。論文“*Garp Medeniyetinin Japonya'ya Dühülü*”、および筆者の日本と日本人に関する前書きと後書きにより構成されている。

“*Garp Medeniyetinin Japonya'ya dühülü*”は日本人 Baron Soyesaço により書かれたものの訳と本文中にあるが、この Soyesaço という人物は末松謙澄男爵ではないかと考えられていたが、明らかではなかった。

今回資料を調べた結果、*Genç Kalemler* で取り上げられている論文は、末松氏がイギリスで刊行した英語論文集 *THE RISEN SUN* 掲載の“*THE INTRODUCTION OF WESTERN CIVILIZATION INTO JAPAN*”と同一の内容であることがわかった。末松謙澄（1855～1920）は官僚、政治家、文学者、法学者と多彩な分野で活躍した人物で、ケンブリッジ大学で文学と法学を学び、源氏物語を初めて英訳・出版したことでも知られている。前述の論文が直接英語からトルコ語に訳されたのか、他の言語で雑誌などに掲載されていたものをさらにトルコ語に訳したのかは定かではないが、筆者が末松氏であることは間違いなくだろう。

2.前書き

冒頭の筆者による前書き部分は以下の通りである。³⁰

リュスティエ学校で地理を学んだ時に、日本についても他の国々と同じように、つまり *İlmihal* (イスラームの原理を説いた本) の宗教規律と同じ要領で暗記したものだ。丁度そのころだったろうか、沈没したエルトゥールル号の幸運にも生き延びた乗組員たちを乗せた 2 隻の日本船がイスタンブルにやってきた³¹。地理の教科書にあった日本についての記述は、この 2 隻の船によって現実のものとなった。私たちにとって何の意味もなかったあの文章が、目の前の 2 隻の船によってはっきりとした形を得たのだ。誰もが彼らを一世界の反対側からやってきた俗にいう「*Ye'cuc Me'cuc*」(人間に危害を加える想像上の生き物) のような存在である、背が低く黄色い顔をした男たちーを見に、また船の中を見学しに出かけた。船を見に行った者たちは小さな男たちにもてなされて帰ってきていた。日本人たちは葉巻を吸う者には細くて黄色い葉巻を、あるいは薄い紙を贈っていた。

ある日、数人の日本の役人が我々の学校を訪ねて来た。友達みんながそうしたように、私もその役人たちを驚きとともに、また驚きのあまり彼らに我々と異なる何かを探してやろうという気持ちで見つめていた。しかし驚くべきものは何も見えなかった。彼らの背は低く、腰の刀もナイフのように小さい。その時、日本という国名は背の低さや細さにつながるものとなった。かくして日本の第一印象はこれらの出来事により形成された。

日本を記憶の奥底から再び呼び戻したのは、日清戦争だった。日清戦争により誰もが再び日本に目を向けた。ごく短期間のうちに中国の首都に達した勝利の行軍は、誰もの注意をひきつけるために重要な事件であった。これ以降は日本を、そして日本人たちを、日露戦争において見た。あの小さな男たちはここへきて大きくなった、実に大きな存在となった。

初めてその存在を知った時には何とも小さく、か細く、貧弱に見え、我々とは別の生き物のように見ていたとすれば、今は大きく、強く、恐ろしい、また

³⁰ Ankara Üniversitesi yayımevi *Genç Kalemler Dergisi*, p185-186

³¹ 前述の「比叡」と「金剛」であると思われる。

しても我々と別の生き物として認識している。この偉大なる日本の進歩を、我々は驚嘆とともに、また教訓を得ながら見なければならぬだろう。

西洋の最も進歩的な国々も羨むほどに発展を遂げ、最も強大で物凄い国々と肩を並べるこの「東洋の英国人」たちがどのようにして進歩したのかを、我々は学習しなければならない。この論文は、日本人の間でその博識と有能によって偉大な人物として知られている末松男爵が祖国の道德、社会、現状、進歩に関して書いたものから構成されている。これらを翻訳し、この雑誌の若い読者たちに紹介したい。

トルコ・コミュニティーの一巨大で類を見ない我が民族の、古い隣人である日本人たちの民族の進歩の舞台を知り、学ぶことは、我々自身が世界に受け入れられるために非常に重要である。

以上が前書きである。日本は名前を知っているだけの遠い国であったが、エルトゥールル号事件によりはじめてその存在を実感した。しかし実際に目にした日本人たちは背が低く貧相で弱々しく、何の力も感じられなかった。その後日清戦争、日露戦争における日本の活躍を知り、今度は日本をアジアにありながらヨーロッパの先進諸国と対等にわたりあう強い国として認識し、その見事な成長ぶりを自分たちも見習わなくてはならないと考えた。当時の知識人階級のトルコ人たちが持っていた日本観はおおよそこのようなものであったと思われる。

トルコ・コミュニティーの古い隣人である日本、という表現もみられ、トルコの人々がやはり日本に共通の民族的ルーツを持つという親近感を抱いていたこともわかる。強大で類を見ない我が民族、という表現には民族主義者向けの雑誌であったことが現れている。アジアのヒーロー的な存在であった日本をトルコ民族コミュニティーの一部とすることで、よりトルコ民族主義の勢いを高めようとする狙いも筆者にはあったのではないだろうか。

3.論文『Garp Medeniyetinin Japonya'ya dühulü』

論文の主な内容は以下の通りである。³²

『西洋文明の日本への流入』

およそ3世紀前に日本へ来たスペイン人やポルトガル人から日本人は文明に関してさほど多くを学ばなかった。しかし当時多くの日本人がキリスト教に改宗した。この外国人たちは日本の木造建築の建築様式に、また文化に多くの影響を与えたと言われている。しかしこの後日本はすべての外国との交流を閉ざしてしまう。(イギリスの東インド会社によって)設立された工場は倒産し、日本からの撤退を余儀なくされた。時折オランダ人たちが長崎の港を訪ねることでだけが許可された。この港にはオランダ人たちによる小さな貿易コロニーが存在していた。彼らはヨーロッパの品物と日本の品物を交換していた。

通訳の仕事をするためにオランダ語を少し勉強した日本人もいた。しかし彼らは現地人とオランダ人の間の取引を可能にするために知っておくべき語学を身につけたただけであった。オランダ語を言語学的ルールに乗っ取り学ぼうとする者は彼らの中にはいなかった。そもそも政府は外国の書物を読むことを一般的に禁じていた。この時代の日本は、ヨーロッパの学問や技術について、ほんの表面的なものだけで満足していたようである。

しかし18世紀の初めになると、事態は大きく変わった。徳川吉宗が徳川幕府第8代将軍の座についた。この人物は有能で、博識で、賢明な意見の持ち主であり、西洋から伝わった全ての物へ大きな関心を示していた。

吉宗は日本へのオランダ製品の流入を禁じる法律を部分的に取り消し、さらには禁じられていた宗教関係の書物もこの許可の対象となった。この時期以降、限られた場所で文法ルールに基づいたオランダ語教育が始まった。

あらゆるヨーロッパの知識の中で、もっとも早く薬学が日本へ取り込まれた。そのため日本の医者たちも初期のオランダ語学習者であった。日本の医療技術

³² Ankara Üniversitesi yayımevi,前掲書 p186-188、p220-221、p240-241
および Kencho Soematsu, "The Introduction of western civilization into Japan", *The risen sun* pp105-111

なお、筆者に関係するエピソード部分等は省略。

は中国の方式をもとに築かれていたが、徐々にヨーロッパの考え方が取って代わり、オランダ人たちの方法がだんだんと必要とされるようになった。

この頃の日本には2つの医学が同時に存在していた。漢方と呼ばれる中国医学と、蘭法と名づけられたオランダ医学である。これに続いてオランダ語の領域が広がり、この言語が知られたことは別の目的も作り出した。主にヨーロッパの技術を学ぶ助けとなったのである。軍事に関する知識も、自然哲学の知識と同時に日本へ入ってきた。

18世紀の終わりにかけて、ヨーロッパの船が時折日本やアジアの海岸に姿を現し、危険視されていた。この頃、中国がヨーロッパにより侵略を受けたという知らせが日本に届いた。この驚くべき知らせに、幕府と全ての藩主たちの間で防衛手段に関する議論がなされ、議論の結果ヨーロッパの兵法について知識を得る必要があるという結論に達した。

初めは医学技術の教育のためオランダ語を学んでいた人々は軍事に関連する書物の翻訳のために共同の支援を受けることになった。これらの本を入手し翻訳するのは簡単ではなかったが、相当な努力がなされた。このことからわかるように、幕府の高官や軍の指導者の多くが当時は医学生であった。

日本は50年前までヨーロッパとの公式な国交を断っていたため、その時までヨーロッパの進歩した思想は日本に入らなかったと西洋の人々は考えている。そして30~40年の間に日本で起きた変化は世界に大きな驚きを与えたのである。しかし実際の歴史は人々に考えられているものとは全く異なっていたのである。オランダの影響が日本の人々にそこまで深く浸透しなかったのは事実であるが、それでも日本の民衆が西洋文明を知るための良いスタートを切り、変化に向けて準備をするためには十分であった。

ここから年代順に様々な歴史上の人物や出来事が登場し、日本と西洋文明との出会いが解説されている。登場するのは青木昆陽、杉田玄白、平賀源内、大槻玄沢、宇田川玄随、伊能忠敬といった人物で、彼らが日本の西洋化においてどのような役割を果たしたのかが年代順に書かれている。これを読んだ当時のトルコの知識人たちは、上記の人物について知識を得ていたということである。

この時代の後、西洋の「黒船」が頻繁に日本の港を訪れ始めた。特に 19 世紀半ばにアメリカ、続いていくつかのヨーロッパの強国が極東に到達したことは、日本に動乱を引き起こした。この頃、日本は「開国」をめぐる真っ二つの意見に分かれていた。

徳川幕府の時代の終わりにかけ、日本人も自分たちから西洋を訪問するようになった。1860年に将軍はアメリカに使節団を派遣した。(中略)1873年には将軍によって若く優秀な学生たちがイギリスに送られ、これに続いてフランスやロシアにも送られた。

海外に学生を派遣したのは幕府だけではなかった。王政を再建する中心となった薩摩藩と長州藩も数人を派遣した。1863年に長州が5人の学生をロンドンに送った。その数年後には薩摩が数名を派遣し、その学生たちは帰国後に国政に関わった。また薩摩は幕府とは別個にパリの万国博覧会にも出展している。

この時代になると、西洋の言語学習や、特に医学や軍事に関する西洋文明の導入に多くの進歩がみられた。

しかし、新たな王政が始まると、国中がヨーロッパのモデルや考えを受け入れることに躍起になった。そこにはまだ多くの困難があったにも関わらず。有能な指導者がアメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、および他のヨーロッパ諸国から募られ、日本からも役人や学生が国のために役立つことを集めるために欧米へ派遣された。これらの国の政府や人々は、日本の発展しようとする努力に協力を惜しまなかった。そのため、日本は西洋文明に基づいて自らを変革し始めた。これは決して容易なことではない。今、欧米の指導者たちの言うとおりにしようと骨折ったことや、欧米の力に張り合おうとしたことにより我々はヨーロッパの大部分で軽蔑されているというが、それは正当なことだろうか。

以上のように末松の論文は日本の西洋化の過程を辿り、最後にはそれに対するヨーロッパでの反応を批判して終わっている。おそらく末松が最も訴えたかったのはこの点なのだろう。

島国である日本の西洋化の過程が、地理的にヨーロッパに近い場所に位置しているトルコの人々にとってどの程度学ぶものがあつたかはわからないが、このような日本人によって書かれた日本についての文章を読む機会は貴重なものであつたに違いない。

4.後書き

論文の後に数行ではあるが、以下のような筆者の後書きが加えられている。

—このような問いで論文は終わっている。我々にとって何と学ぶことの多い内容であることか。

ヨーロッパへ行くこと、西洋の進歩を見ること、祖国のため利用できることを探し、発見し、手に入れること。しかし後悔すべきことに我々はヨーロッパへ行き、祖国のために役に立つどころか害となるようなものを探しあてている。

そして、最も学ぶべき点は、ヨーロッパの新しい人々が日本の動きに対して示した反感である。我々自身に対してもこの反感は存在する。しかし日本人のように働き、日本人のように結束したなら、ヨーロッパの反感にも末松男爵のように立ち向かえるだろう。

この部分も読んでいて非常に興味深い。筆者の考えによればトルコの目指すところはあくまでも西洋列強と肩を並べることにあるようだ。例えば、日本と協力してアジアをまとめ、ヨーロッパに対抗しよう、などという発想は出てこない。日本との国交樹立に向けた動きについて筆者が（あるいは当時の知識人階級が）どの程度知っていたかはわからないが、日本は西洋に追いつくための「お手本」として取り上げられており、トルコと日本 2 国間の関係については特に触れられてはいない。しかしそれでも、日本に対する強い憧れと尊敬の念は感じられる。

(2) アブデュルレシト・イブラヒム「ジャポonya」

1. 作者について

アブデュルレシト・イブラヒムは帝政ロシアのトボリスク地方に生まれたタートル人である。帝政ロシアにおけるイスラーム教育に絶望したイブラヒムは国を出て、メッカとメディナでイスラームを学んだ。その後イスタンブルへ移り、イスラーム世界の様々な知識人たちと交流を持った。1885年に祖国へ戻りイスラーム法の裁判官となるも、ロシア政府が抑圧的な対ムスリム政策をとったために数年で職を辞し、イスタンブルへ移住する。ロシア政府を批判する活動を行ないいったん投獄されたが、日露戦争や第一次革命によりロシア政府の力が弱まると、高まるロシア・ムスリム民族運動の指導者として活動し続けた。しかし帝政が勢いを取り戻すと、民族運動は下火になり、イブラヒムはイスラーム圏を巡る旅を開始する。トルキスタン、シベリア、モンゴル、満州を旅したイブラヒムは1909年、ウラジオストクから船に乗り日本を目指した。

イブラヒムは約半年の間日本に滞在し、横浜を起点に様々な場所を訪れて見聞を広め、同時に多くの著名人と面会してもいる。彼の訪日の最大の目的は日本にイスラームを広めることであり、この本の中にも日本におけるイスラームについての記述が多く見られる。それも非常に興味深い内容ではあるが、ここでは彼がひとりのイスラーム系ロシア人として、またイスタンブルに長く滞在しトルコの知識人たちにも影響力を持っていたであろう人物として、彼が日本という国とそこに暮らす人々にどのような印象を抱いたのか、その部分に注目して彼の記録をみてゆきたい。

2. 日本人に対する印象

イブラヒムの日本人に対する評価は一貫して肯定的である。批判はほとんどないと言ってよい。

具体的なエピソードとしては、敦賀から米原へ向かう汽車の中で、ばらばらに預けた荷物がどれひと紛失せずに戻ってきたことに感激し、「その国民の信頼性というのは、そこに一歩足を踏み入れただけで、ささいなことから判るもの

なのである」³³と述べている。これがイブラヒムの日本人に対する第一印象であった。さらに港から駅まで案内してくれた青年に対して「一介の青年が、労働者階級の身でありながら、自分の国へ来た外国の客に対してなんと面倒見のよいことか。これを目の当たりにして、何と立派な人間性よ！と言わずにおられようか」³⁴と賞賛の言葉を送っている。

また汽車の中での人々の態度については「乗っている人たちもきわめて紳士的である（中略）みな読書にいそしみ、私の服装や動静をあやしむ者としてない。誰も他人に気を取られたりはしない。これがわがロシアやヨーロッパの文化圏であったなら、私のような異邦人にはみな視線が集まり、さぞや屈辱感を味わったことだろう」³⁵と述べている。日本の印象はヨーロッパよりもよかったようである。

横浜に到着し、日本の都会を目にしたイブラヒムの感想は次のようなものである。

「誰もが何かにせきたてられている。道にはあらゆる人があふれ、往来は途絶えることがない。次に、これらの人々は皆小走りに通り過ぎて行く」³⁶

「市内のどこへ行っても、日本人が何をするにもせっかちな国民であることが見てとれた。いたる所にあふれる人々。ありとあらゆる通り、商店、工房、工場、どこであろうと、ぼんやり座っている人には一人もお目にかかれない」³⁷

せかせかしている、というのはイブラヒムの日本に対する数少ない批判的な意見のひとつである。

イブラヒムは日本の迅速かつ正確な郵便制度にも感動したようである。郵便局員の誠実な対応ぶりを見て、「この郵便局員にしてこの国民！この国民の賞賛されるべき行ないを書いていたらきりがない」³⁸と書き記している。

また、小額のつり銭をわざわざ追いかけて渡してくれた茶店の店員、日本円

³³ アブデュルレシト・イブラヒム著、小松香織、小松久男訳『ジャポニヤーイスラム系ロシア人の見た明治日本』p9

³⁴ イブラヒム、前掲書、p10

³⁵ イブラヒム、前掲書、p13

³⁶ イブラヒム、前掲書、p16

³⁷ イブラヒム、前掲書、p17

³⁸ イブラヒム、前掲書、p44

を持ち合わせていなかった時に両替をしてくれた本屋の主人など、他にも日本人の誠実さを実感するようなエピソードは多かったようだ。

イブラヒムは全 6 章からなる旅行記の最終章で、「日本人」という項目を設け、日本および日本人についてあらためて考察している。それまでに述べたような日本人の勤勉で誠実、清潔な国民性を評価した上でイブラヒムが主張しているのは、日本人の生来の特質がイスラームの教えと合致しているということである。「その精神はキリスト教の影響で侵害を受けたとはいえ、彼らは直ちに改善に着手している」³⁹とまで述べている。続く「日本の将来とイスラム」の項では、イスラームに改宗することで日本の将来は政治的にもよりよいものになる、とさらに日本のイスラーム化を推奨している。中国やインドネシアにはムスリムが多いのでこれらの国は改宗した日本を支持するであろう、などこの部分には極端な意見が目立つが、汎イスラーム主義を広めるため日本を訪れたイブラヒムは、大きな手ごたえを感じつつ帰国の途に着いたようである。

日本人の特性がイスラームの教えに適している、という意見は興味深い。イスラーム諸国が概して親日的だといわれることにも何らかの関係があるのかもしれない。

³⁹ イブラヒム、前掲書、p390

終章

ここまで様々な文献を通じて、近代の日本とトルコが互いにどのような印象を抱いていたのかをみてきた。そこから見えてきたのは、予想できたことではあるが「憧れるトルコ、西洋だけを見る日本、遠い両国」という図式である。

トルコと日本はどちらも、アジアの国でありながらヨーロッパの国々と肩を並べられるような西洋的近代国家になることを目指していた。日本の場合、それに成功した、といわれている。そしてトルコではそれは上手くゆかなかった。なぜ日本は西洋化に成功し、トルコは思うような結果が出せなかったのかという比較は本稿の論点ではないが、トルコは成功者・日本に憧れ、その成功への過程を学ぼうとしていた。あるいは、同じ民族的ルーツを持つと信じられていた日本の成功に続こうとしたともいえる。

一方で、この時代の日本の視線は常に欧米へ向いていた、と言い切ってしまうのもよいだろう。トルコとの国交樹立へむけた動きにも、自国に有利な条件でなるべく多くの国と条約を締結することで欧米列強に追いつきたいという狙いがあったといえる。エルトゥールル号事件や山田寅次郎の活躍などの心あたたまるエピソードも確かに存在したが、国対国のレベルでは日本にとってのトルコはやはり残念ながら「その他大勢」の後進国のひとつに過ぎなかったということだ。その証拠に日本人のイスタンブル滞在記はどれも、トルコより日本が進んでいるという大前提のもとに書かれているように感じられた。

ただし、このような想定内の結論しか導き出せなかったのは、残念ながら今回トルコ側の資料を十分に集めることができなかったことも原因である。もっと違った角度から当時のトルコ人の意見を知ることができる資料があれば、さらに発展した考察ができていたかと思われる。

参考文献一覧

第 1 章

池井優・坂本勉編『近代日本とトルコ世界』（勁草書房、1999年）

内藤智秀『日土交渉史』（泉書院、1931年）

長場紘「日本とトルコ—国交樹立への歩み—」『現代の中東』22号（1993年7月）

日本・トルコ協会70年史編纂委員会編『日本・トルコ協会70年史』（日本・トルコ協会、1992年）

第 2 章

小椋元吉、松村龍雄述『軍艦比叻土耳其古国航海報告』（水路部、1892年）

鎌田栄吉『欧米漫遊雑記』（博文館、1899年）

黒板勝美『西遊二年欧米文明記』（復刊：ゆまに書房、1989年）

中井弘『漫遊記程』（避暑洞、1877年）

長場紘『近代トルコ見聞録』（慶應義塾大学出版会、2000年）

藤戸永綱、磯部謙次郎術『軍艦金剛土耳其古国航海報告』（水路部、1891年）

二葉憲香、福嶋寛隆編『島地黙雷全集』第5巻（本願寺出版部、1978年）

第 3 章

İsmail Parlatır, Nurullah Çetin (eds.), *Genç Kalemler Dergisi*, Ankara: Türk Dil Kurumu, 1999.,

Kencho Soematsu, "The Introduction of western civilization into Japan",
The risen sun, London, 1905

アブデュルレシト・イブラヒム著、小松香織、小松久男訳『ジャポニヤ—イスラム系ロシア人の見た明治日本』（第三書館、1992年）